始

53-118
2416

陸軍三等軍醫正 醫學士 田村化三郎 著

胃弱の根治法

東京 健友社 發行

大正
4. 7. 17
内交

著者　田村醫學士

東京府平民
醫學士　田村化三郎
四谷東信濃町九

君は明治二年一月廿六日を以て日向國高鍋町に生れ家世々高鍋藩の儒者にして士族田村義勝氏の三男なり（東京府へ分家轉籍の爲め平民となる）明治三十二年東京帝國大學醫科大學を卒業し同年六月より陸軍々醫として奉職す、明治卅五年五月米國に被差遣同國軍醫協會に於て日本軍醫を代表して一場の講演を爲せり、明治三十六年八月小池醫務局長清國差遣に付隨行被仰付、同年陸軍々醫學校教官となり明治卅七年六月第四軍司令部附として出征し同年十二月陸軍三等軍醫正に任せられ横須賀衛戍病院長を命せらる戰時の功に依り勳四等に叙せられ金千圓を賜はる明治卅八年十一月病に依り休職被仰付爾來現所に開業し、傍ら著作に從事す、君の著書には袖珍獨和字典、組織學講義等あり其他通俗衛生に關し讀賣新聞に寄稿せるもの多し、其中、神經の衛生、肥る法痩る法等著聞す一昨年九月自費歐洲見學の途に上り英獨佛の間に研修し本年六月歸朝す　（帝國醫鑑より抄）

胃弱の根治法

目次

緒論……一
慢性胃加答兒症……二
胃アトニー症……七
胃擴張症……一〇
胃擴張の容態……一一
胃擴張の診斷……一三
胃擴張の療法……一四
胃下垂症……一六
神經性消化不良症……一七
胃酸過多症……二〇
胃酸缺乏及減少症……二二
食思缺乏症……二三
善飢症……二三
胃知覺過敏症……二四
神經性胃痛……二四
胃弱の根治法……二七
實驗例五例……二七
胃戒十則……二八

胃弱の根治法

醫學士　田村化三郎述

緒論

胃弱とは何を指すか通俗には單に胃が惡い胃が弱いと云ふのであるが精密に醫學上から云ふと慢性の胃加答兒症、胃アトニー症、胃擴張症、胃下垂症、其外神經性消化不良症、胃酸過多症、胃酸缺乏及減少症、食慾缺乏症、善飢症、胃知覺過敏症、神經性胃痛等の内其一つか又は二つ以上の混合合併症である、前の四症は器質的即ち胃其物に變化の起る純粹の胃病であるが後の七症は官能的即ち胃其物には變化が無く神經の故障で胃液の分泌や胃の知覺や消化に變化の起る所謂胃の神經症である、故に前者は胃病の藥や治療で多くは治癒するが後者は其れでは癒らない、然るに世間で胃病者が容易に根治せず往往永い經過を取り所謂胃弱は恰かも不治の病かのやうに見へるのは單純の胃病は少なくて多くは右の神經症を混合して居るからである、

余は世人に向つて此處の道理を精しく説明し進んで胃弱の根治法を詳述しやうと思ふ、其の順序として先づ左に各症に付て述べて見やう。

慢性胃加答兒症

此病こそは胃病の内最も多い病で世の胃病者胃弱者と云ふのは大抵此病に罹つて居るのである、本病の原因は種々雑多であるが、成るべく簡明に其の要點を摘んで述ぶれば左の通りである。

（一）食物の不攝生、此内で咀嚼の不充分と時間の不規則とが主眼である、故に早飯早喰は宜しくない、又餘り食事時間の不規則なのは善くないが、併し世の中のことは版で押したやうに規則正しくは行かぬ勝である、少し位早くても晩くても餘り氣にするは却つて惡い、是も程度問題です、軍人などは早飯の習慣が必要かも知れぬ。

（二）不良の齒牙、齒の惡いのは自然咀嚼が不充分になり、本病の原因となるから齲齒の多い人や齒の弱い人は齒の養生が肝要である。

（三）「アルコール」の濫用、暴飲大酒は本病の原因となる、特に酒客加答兒と云ふ名さへある、大酒家の食慾が薄いのは其の爲めである、又過度の喫煙も此病を起すが酒の害の方が遙かに強い。

（四）胃の鬱血狀態、胃が絶へず鬱血の狀態に在ることは本病の原因となる、之を特に鬱血加答兒と云ふ、即ち慢性の呼吸器病や血行器病があれば自然胃にも鬱血する、又肝臟病殊に肝硬化症にも鬱血が起る、其外諸種の貧血や惡液質にも本病が續發する。

（五）他種の胃病、胃に外の胃病が有れば自然慢性胃加答兒が起るやうになる、胃癌が有れば必らず本病を伴ふが常である、但し本病が土臺に有つて後に胃癌になる場合もある、又急性胃加答兒も養生法が適當でないと、本病に移り行くこともある。

本病は女よりも男に多く、殊に弱年者よりも大人に多いのである、さて本病の症候は大抵急性胃加答兒と同樣であるが、唯其容態が急劇でなく食思は缺乏不振であるが、時にはいくらでも喰へることがある、是は善飢症と云ふて病的現象である、所謂百鯨の大川を吸ふが如く、胃中に何か魔物が居て食物を引き攫り込むかの樣に自分も感じ人も思ふ大食は必らず本病であるか、又は神經性症であるから醫の診療を要する、口は渇くこともあるが急性症に比すれば稀れである、舌には白色又は褐色の苔が附き、糊樣味覺即ち糊を嘗めるやうな味もあり、又は腐敗したやうな味覺がある、且極めて不快な口臭を放ち、唾液の分泌が增して來る、其外嚥氣、吃逆、噌嘰も現はれる、即ち胃中より酸味の瓦斯が出て胸は灼ける、吃逆の附くので誠に不快である、胃部には絶ず充滿と緊張の感覺があり時々輕く痛み時には劇痛を發することもある、嘔吐は急性症程多くはない、飲酒家は往々早朝に嘔吐があり唾液のやうなものを吐くことがあるが、是は前夜に嚥下した唾液であつて之を酒客早晨嘔吐症と名づけ

る、胃部を診するに實際多少膨滿して居る、之を壓せば痛を覺ゆる、少しく振つて見れば、輕度の振水音がある、但し胃擴張のやうに甚しくはない。

胃の作用は頗る鈍くなり殊に其の運動が減るので食物は永く停滯して容易に腐敗分解する、又鹽酸の分泌は減り重症の塲合は全く無くなり大に消化作用は妨げられ又は皆無となる、且つ吸收作用も極めて緩慢となる、極く重症の塲合は胃の腺が全く頽廢して鹽酸も百弗聖も胃液素も無くなり消化は全く無くなる。

便通は多くは秘結して下痢のことは稀れである尿は分量が減り從つて濃厚となる、之を放置すれば沈澱物が出來る。

本病には熱の出ることは殆んど無いが、病者の營養は著しく犯され大に痩せて來る、故に天下の痩黨の大多數は慢性胃病者か神經病者か又は此両者を兼ねた人である、胃と神經との關係は實に密接である、次に顏色は蒼白色となり、皮膚は枯燥し「かさ〳〵」となり恰かも胃癌でも潛伏して在るかと疑ふ塲合がある。

慢性胃加答兒と神經との關係は極めて著明であつて本病者は往々神經衰弱又は比ト昆埜里の容態を起し思考力、記憶力、判斷力等が鈍くなり少しも仕事が手に附かず何をするも懶く他人と談話するさへ嫌になり從つて何を見ても聞いても無趣味、無興味となり果ては世の中が嫌になり人生を悲觀し將來の目的も希望も無くなり極めて憫むべき悲慘の境遇に陥ることがある、且つ諸種の妄念、雜念に苦しみ種々の强迫觀念や恐怖症に惱され、殊に自分の病氣のことばかり氣になるのである、此等神經性の容態に付て精しいことを知り度い人は余の小著「神經の衞生」を一讀すれば尙善く分る、其の外頭痛、頭内朦朧の感あり、殊に眩暈は本病に特有で之を胃病性眩暈と云ふ、又心悸亢進、心臟部の苦悶劇痛を起すこともある、且つ又喘息の樣な發作が起る之を消化不良性喘息と云ふ。

以上は本症に伴ふ神經症であるが、胃と神經と密接の關係あることは之でも一寸分る。

さて本病の經過は種々で一定しないが數年の久しきに亘るのもあり、一生癒らないで墓に葬らるゝのもある、後發症は主もに胃擴張症であつて時には胃癌を續發することもある、豫後は病者の攝生如何に依つて定まる飲食の攝生と酒煙草の濫用を廢するとが病の運命を定むる主點です。

本病の療養法は先づ其の原因を去らねばならぬ、即ち、成るべく飲食の時間を正しくし充分に食物を咀嚼して消化し易いやうにする故に齒の健康にも注意し酒と煙草は節制又は嚴禁せねばならぬ、但し以上を勵行しやうとし出來ない爲めに大に苦慮煩悶する位ならば寧ろ出來る範圍内で實行して其餘は多少原則に脫づれても安心滿足して居る方が身心の健康上有利であると余は信ずる、何となれば苦慮煩悶は神經の衞生上大禁物で折角肉體の衞生に適ふやうに努めても神經の衞生を害しては何にもならぬばかりでなく其れが又胃病の原因となるからである。

次に對症療法は胃の障害の程度に應じて種々である、胃液に鹽酸が缺乏する時は稀鹽酸を用ゐる、（一盞の微溫湯に稀鹽酸十滴を加へ食後半時間服用）又百弗聖を缺如すれば百弗聖を與ふる（一回、一小刀尖）

胃內容物の醱酵が盛んで酸味の瓦斯が出る時は胃洗滌が適當であるが服藥で之を抑さへることが出來る、最も善いのは撒里矢爾酸（一回〇、三食前半時間）結麗阿曹篤（一回、一丸、〇、〇一食後十分）「レゾルチン」（一回〇、一食前半時間）、「ベンツオール」（一回十滴牛乳に混じ食前）等であるが分量は普通量を擧げたのである。

又胃液の分泌を促し食物の停滯を防ぐには苦味の健胃藥が必要である、例へば苦味丁幾、健質亞那丁幾、番木鼈丁幾、括矢亞、昆需蘭護、古倫僕等で此等は同時に食思不振に効がある、其外單に食欲を亢進さする藥がある、之を「オレキシン」と云ふ余は日露戰役の際此藥を用意して出征したが戰地で評判になり己れも吾れもと望み人が多く忽ち無くなるので幾度も內地に注文した次に直接胃の粘膜に働き胃の加答兒を癒す爲めに醫者の用ゐるものは次硝酸蒼鉛、酸硫酸鉛、硝酸銀等である、胃痛の劇しい時は萇若越幾斯、阿片、莫兒比涅等の鎭痛劑を用ゐる、以上皆病者自ら用ゐるのは危險故唯名稱だけで分量用法等は特に擧げぬことにした又貧血が現はるれば鐵劑を與ふるのであるが併し病者が其の服用に堪へぬことがある最後に本病者の用ゆべき消化藥は「タカヂアスターゼ」「ヂゲスチン」等種々である。

胃「アトニー」症（胃筋弛緩症）

此病は名の示す通り胃の筋肉が虛弱に陷りたる狀態で、弛緩しては居るが併し未だ擴張しては居らぬのである、但し食物を多量に取は幾分か擴張するのである、急性と慢性とあるが急性よりは慢性の方が多い。

此病は先天性又は神經性に原發することもあるが多くは續發性であつて他の胃病即ち胃潰瘍、胃下垂症、慢性胃加答兒神經性消化不良症などに起る、又他臟器の病例へば腸管狹窄症、膽石病などに起る、其外本病の原因となるものを擧げて見れば個人の素質が筋肉薄弱であること、暴食過食で胃の筋肉を過勞すること殊に不消化物の過食である、其他の誘因は嗜好品又は藥品の濫用例へば暴飲、大酒、又は下劑や麻醉藥の濫用などである）

此病は又神經衰弱「ヒステリー」の續發症として現はれることが多い、脊髓癆にも起る、又生殖器に病があれば反射的に本病を起すことがある此等の場合は胃「アトニー」症が神經病として發するのである。

本病の容態は自覺症狀では（第一）胃部膨滿の感である、食慾には別に變化はないが極めて少しの分

量を喰ふても直ぐに充滿の感が起る、之が爲め壓重の感も起る、次に嗳氣が善く出る、但し多くは臭は無いが時には食物と同臭である、然るに嗳氣が出ても不快では無くて却て心持は善いのである、又稀れには食慾が無くなることもある、重症の場合は頭痛や眩暈を起したり又は消化不良性喘息を起すこともある腸も共に「アトニー」に陷れば便秘を起すのである。

他覺症狀を云ふて見れば先づ病者を診るに胃部は幾分か高くなつて見えるが併し其の大さは健康者と大差は無い、然るに食物を取らすとか水又は瓦斯を送りて檢すれば前よりも大きくなる、次に著明なのは振水音で指先で輕く打てば尙善く聞える、試驗食を與へて五時間の後に胃內容物を檢査して見れば健康胃ならば食物は殘らぬが「アトニー」があれば多少食物の殘渣が出る。

此病は胃擴張、神經性消化不良、慢性胃加答兒、胃下垂、此四つの病と酷く似て居る點が多い、此等との鑑別點を云ふて見れば（一）胃擴張との區別は食慾に變化の無いこと、食物の停滯が比較的短いこと振水音の低いこと、口渴を伴はぬこと、便秘の少いこと等である。

（二）神經性消化不良との區別は此病は純神經性の病故日と時とにより容態が色々に變化する、且つ食物の分量と種類に依りて餘り變化が無いが「アトニー」症には此事が無い（三）慢性胃加答兒との區別は胃內容物に粘液を混じないこと、胃液分泌の障害が初期には無いこと等である（四）胃下垂との區別は物理學的診査法で充分胃の境界を定むれば善く鑑別が出來る、但し同時に二症が併發することもある。

本病の經過は大抵慢性で、永い經過を取るが併し適當に治療すれば癒り易い、但全身の營養が衰へ易い故注意しないと他の餘症を起し易い、豫後は治療次第で良である。

本病の療法は食養生が肝要で胃の勞力を輕くするのが主眼である即ち一回の量を減じて幾度にも分けて喰べる、且つ消化し易く滋養に富んだものを選び咀嚼を充分にする、茲に注意すべきは何時までもビク〳〵して用心ばかりせず漸次輕快するに連れて食物の量も增し種類も變へて平常の食事に移らねばならぬことである。

次に器械療法が必要で胃洗滌法、電氣療法、按摩法、水治法、體操療法などである皆衰弱せる筋肉を興奮刺戟する法で適當に醫の監督の下に行へば有効である。

最後に醫者の用る藥は先づ斯篤里幾尼涅である、ウオルフ氏は此藥で確かに一定度まで胃筋の運動力を回復することが出來ると云ふて居る、次に「クレオソート」（一回〇、〇三）が善いとクレンベレル氏が唱へた、其外消化不良等の對症療法として番木鼈越幾斯、ザルチル酸蒼鉛、同曹達、安息香酸曹達、「レゾルチン」「イヒチオール」「ザロール」等を用るのである、長與博士の處方は「イヒチオール」〇、三、番木鼈越幾斯〇、〇五、右膠囊に入れ一日三回食後三時分服である。

胃擴張症

胃擴張と云ふ病は極めて多い病氣で子供にさへ有る、最も多いのは十五歳から四十歳までの間であつて女子よりも男子の方が多い此病は讀んで字の如く胃が大きく廣がる病氣であつて必らず胃の内容物が蓄積停滯して醗酵作用を起すのである、且つ後天性に起るので決して先天性の胃擴張は無い、本病の起る主もな原因を擧げて見れば左の通りである。

（一）幽門狹窄　胃の出口なる幽門が狹くなれば自然胃は擴張する譯で是が最も多い本病の原因である幽門の狹窄は如何して起るかと云ふに（イ）胃潰瘍其他の病で幽門部に瘢痕を生じた場合（ロ）幽門癌（ハ）幽門部を外より壓迫又は牽引すること例へば腸、肝臟、腎臟等の腫物、又は遊走腎などの場合（ニ）其外幽門輪の肥大（ホ）幽門部の異物箝入等である。

（二）暴食　食慾以上に食物を過度に攝取し爲めに胃を屢々過度に擴げれば本病に罹る故に暴食暴飲家又は糖尿病者は之に罹ることが多い。

（三）胃壁の病　例へば慢性胃加答兒などは胃壁即ち粘膜の病氣であつて自然擴張し易くなる又胃潰瘍か胃壁に廣がつて居れば本病を起し易いのである。

（四）神經作用　又往々神經作用で胃の筋肉を衰弱させ遂に胃が擴張することがある例へば神經衰弱其他の神經病又は貧血病者、肺癆、窒扶斯病者等に起るのも神經の作用である。

（五）胃の癒着　胃が近隣の臟器と癒着して運動が充分用來ぬ時は自然に擴張を起し易くなる。

胃の擴張は何れ位の程度に達し得るかと云ふに極端の例では胃が腹部全體に擴がり上は胸の押し落しの處下は小骨盤内に達した例もある、從つて其中に大量の胃内容物を含み時には二十「リーテル」（約一斗）を超ゆることがある、解剖の結果は胃壁が薄くなるのと却つて厚くなるのとある前者は萎縮性で後者は肥大性の胃擴張症である、薄くなるは理窟は分つて居るが厚くなるのは如何な譯かと云ふに幽門狹窄の時胃が擴がりつゝ大に働くので肥厚するのである。

胃擴張の容態

胃が擴張すれば何んな容態を起すかと云ふに（第一）胃部の振水音（第二）嘔吐（第三）酸性の嗳氣（第四）胸の灼ける感覺（嘈囃）（第五）吃逆（第六）食思不振又は亢進（第七）全身の營養衰へて痩せること等である、以上の容態に付て尙精しく左に述べて見やう。

（第一）振水音とは試みに胃部を振盪して見れば「パチャ〳〵」と云ふ音のすることで腹が獨で「グル〳〵」鳴るのとは別である。但し健康な胃でも瓦斯と液體と同時に在れば同樣の音がすることもあるが胃擴張では此音が極高調で且つ必らず有るのである（第二）嘔吐は必らず有るとは限らぬが有れ

ば一回の吐出量が著しく多量である且つ其の化學反應は強酸性であるのが特徴である是は鹽酸過多ではなくて胃の内容物が醗酵して乳酸や牛酪酸と云ふ別の酸が出來る爲めである、（第三）右の爲め嗳氣が出て是が酸性である故に酸ぱい味のする瓦斯や液が口から出るのは此の爲めである、（第四）嘔吐や嗳氣の後胸の灼ける感覺がするのも同じ道理である、（第五）食慾は全く缺乏することもあるが其の反對に非常に亢進することもある、幽門癌腫の爲めに胃擴張を來した場合は無論食慾は無くなるが其餘の場合は大抵亢進する、食慾の亢進するのを善飢症と云ふ此れの起る譯は折角取つた食物も胃の吸收は惡るく且つ時々嘔吐が有るので實際病者の體に吸收せらるゝ分量は極く少ないので飢を感ずるのである、又病者の口が甚しく渴くこともある之も折角飲んだ物が充分胃から吸收されず胃に停つて腸に移り行く分量も少ないからである。

右の外舌には苦は附かず眞赤である是は酸ぱい物が出るので洗ひ落すのである、又尿は分量が減つて來る、便は秘結して一週一回位になる是は食物が腸に移ることが少ないからである、又全身の營養は著しく減じて次第に瘦せて來る、皮膚は薄くなる筋肉は弛み脂肪は減り顏には皺が出來て汚い灰白色となる、故に若しも此營養を充分恢復することが出來ぬ曉には次第に衰弱して遂に死ぬることさへある。

胃擴張の診斷

胃が慥に擴張して居ると云ふことは如何して診斷するかと云ふに最も簡單な方法は打診だけで定めるのである即ち醫者が胃部を打診して其音で胃の擴大して居るか否かを定めるのである、然るに尙之を精確に診斷するには炭酸瓦斯で胃を膨脹さして見る法がある即ち其法は酒石酸一茶匙をコップ一杯の水に溶して之を病者に飲ませ直ちに重炭酸曹達一茶匙を同じくコップ一杯の水に溶して飲ませる、左すれば一二秒時の後炭酸瓦斯が多量に發生するので胃は見る見る膨脹して一見して胃擴張の在るか無きかゝ分る、之を打診して見れば空氣枕を叩いたやうな音即ち鼓音を發し胃の下界が臍部又は其れ以下にも達する甚しいのは膀胱部にさへ達することがある、健康な胃ならば其の下界が普通臍部より以上で指を横に一本か二本並べた位の高さに在るが其れより以下ならば病的である但し胃の下界は臍より下に達して兩側が通常と相違が無い時は單に胃の下垂症であつて擴張症ではない、又若し上下左右に胃が大きくなつて居ても單に是れだけで直ちに胃擴張症と診斷するのは早計である、何となれば先天性に巨大な胃を有する人もあるからで、之を巨大胃と名づくる、故に他の病的容態の有無を善く診査せねば誤診することがある、又ベンツオルト、デヒオ氏法と云ふのがある、其法は早朝空腹時に病者を起立させ二盃或は三盃の水を飲ませ一杯毎に胃の下界を打診するのである、左すれば胃の

下界は何の邊に在るか善く分り且つ胃が弛緩して居る場合は一杯毎に胃の下界が下方に移るのさへ分るのである。

又胃擴張では胃に滯つて居る內容物が醱酵して瓦斯が澤山出來るので別に前記のやうな人工的炭酸瓦斯膨脹法を用ゐぬでも自然に膨脹して其の境を診定することが容易に出來る場合もある又幽門狹窄の爲め胃擴張を起した時は胃の噴門から幽門の方へ向つて著しく胃の蠕動即ち蟲の匐ふやうな運動を呈して目に視えることさへある。

胃擴張の經過は病者の養生次第で永くもなり又は早く癒るが此病の豫後は良であつて全快する望がある但し幽門の癌腫の爲めに起つた胃擴張は無論豫後は不良である。

胃擴張の療法

胃擴張は如何して治療するかと云ふに幽門狹窄が原因で起つた場合は無論外科手術に依らねばならぬ即ち幽門切除術又は幽門輪開張術等であるが若しも目的を達し得ぬ時は胃腸瘻造成術で人工的に胃と腸との連絡を圖らねばならぬ併し其餘の原因で起つた普通の胃擴張は手術には及ばない、最も簡便で最も有効なものは胃洗滌法である即ち胃を水で洗ふ法で何のことは無い胃の洗濯です、一寸聞くと胃を洗ふと云ふことは大變なことのやうに思はれるが實際は何でも無い、其法は先づネラトン氏食道消息子と云ふ護謨の長い管がある、之に長さ一迷突の別な護謨管を連絡し其端に硝子の漏斗を附ける此裝置をヘガル氏漏斗と名づける今胃擴張患者の胃を洗ふには如何するかと云ふに先づ病者を椅子にかゝらせ右の消息子を口から挿入して胃に達する、口から胃まで管を挿し込むと云へば大變なことに聞えるが實は雜作も無い話で唯最初咽頭の曲つた處を管が通る時少し變なだけで後は何でもない、さて管が胃に達すれば微溫湯を硝子の漏斗に注入する、左すれば次第に湯が胃に入りて遂には入らなくなり病者も胃部に膨滿の感が起る、此時一寸護謨管を摘みて漏斗を倒さにすれば湯は逆に流れて出るに連れ胃の內容物が外に出て來るのである、次に同じ方法で幾度も反覆して洗へば最初は出るものが濁つて居ても後には澄んで來る、實際善く澄むまで洗濯すべきである、次に必要の場合には藥を入れて洗ふのであるが此れに用ゐる藥は人工加兒斯泉鹽又は撒里矢爾酸である。

胃洗滌法を行ふのは朝が最も適當であるが特に夜分に胃の工合が惡い人は夜間行ふても差支は無い、最初は毎日之を行ひ病氣が輕くなるに連れて隔日又は數日後に行ふても宜しい、但し大抵病者は最初一回の洗滌で大に輕快を覺え顏色も善くなり氣分も快活となり漸次體力を回復して體量も增して來るものである、胃洗滌を行つた後は一二時間身體を安靜にせねばならぬ尙胃部に氷囊を當てたり胃に按摩を施せる結構である、胃擴張病者の食養生法は努めて澱粉質糖分を避け液體の飮用を大に節限し主として動物性の食物を少量に取ることが肝要である。

本病の藥用法は斯篤里規尼涅の皮下注射、番木鼈越幾斯の内服其他單寧酸「オレキシン」、結麗阿曹篤「デゲストーゼ」健質亞那末等で同時に胃加答兒があれば重炭酸那篤護謨、加兒爾斯泉鹽等を用ゐるのである。

症下垂症

胃下垂症とは其名の示す通り胃が其位置を變じて少し下方に下がるのである、故に胃の在るべき場所は却つて凹みて其下の處が幾らか高くなつて見える、前に述べた胃擴張の診斷に用ゐる炭酸瓦斯膨滿法を行つて見れば尙著しく胃の下がつて居ることが分る、此病は先天性のもあるが多くは後天性である男女共主もに胸廓の扁平で細長い人、上が廣くて下の細い胸（漏斗胸）又は前面中央の突出した俗に云ふ鳩胸（雉胸）などの人に來る、又平常胃の處を强く緊める人に多い、其外横隔膜や肝臟の下垂又は肝臟の腫脹などにも伴つて現はれる。

胃が下垂すれば如何な容態が起るかと云ふに著しく神經の容態が現れて來る。即ち神經衰弱が比斯的里のやうな風で全身はだるく頭は重く背部に疼痛があり少時間起立して居れば直ぐに腰が痛いやうな脱けるやうな不快な感覺が起る、且つ仕事が嫌やで直ぐに疲れて忍耐に乏しく氣分は鬱いで何を見ても面白くない、其外食氣は振はず、嘔氣があり胃部に疼痛が起り嗳氣や嘈囃（胸の灼ける感覺）などが現はれる、今病者を直立させて腹部を善く注意して見れば胃の處が却つて扁平か又は凹んで見え臍の處に胃の形をして高くなつて居るのが善く分るのである。

本病があれば自然胃の運動を妨げられ遂には胃擴張を起し易い、又胃擴張があれば自然胃の下垂を起し易いのである、此兩者は密接の關係があるので大抵同時に兩病とも合併する場合が多いのである。

胃下垂症の療法は主もに器械的方法であつて平常腹帶を胃の下方に緊めて此上胃が下がらぬやう又少しづゝ上方に押し上げるやうにする、食物は消化し易いものを少量に取り食後一二時間は仰臥して身體の安靜を守り餘まり多量に飲み物を用ること、永く起立すること、永く歩行することなどは成るべく之を避けねばならぬ、其外腹部に按摩、電氣、冷水灌漑、冷水摩擦等も宜しい、又注意して便通を善くせねばならぬが併し下劑は成るべく用ゐないで適宜の運動と腹部按摩で便通を善くする方が善い。

藥物は此病には効が薄いが全身の强壯と胃壁の緊張を謀る積で鹽酸規尼涅、亞砒酸、斯篤里規尼涅などゝ云ふ藥を醫者は用ゐるのである。

神經性消化不良

（一名胃性神經衰弱）

本病は胃其物には別段何の變化もなくて而かも自覺症狀が極めて多い一種の病である。

其の容態は極めて不定であるが多くは食後直ちに起る、食物の分量にも種類にも少しも關係はなくて種々不快の容態が現はれる、病者は年中不快で一日も晴れ〳〵しひ氣分にならず胃部に絶へず張るやうな重いやうな壓されるやうな感じがする、其れを全く空腹である時でも感ずる、其上嘔氣、頭痛、心悸亢進、顔面潮紅なども加はり時には眩暈がする、食欲は大抵減ずるが時には無暗に喰へて困ることもある、又時に瀕りに嚏氣が出ることもある。

本病の初期には左程のこともないが少しく病が進むに連れて病者は漸次痩せて來る、如何に多く充分に滋養物を食しても矢張り體量は減じて來る、胃病者が滋養は充分に取つても取つても矢張り肥らぬのみか益々〳〵痩せて行くと云ふのは多くは本病に罹つて居るのである、從つて睡眠は妨げられて不眠に陥り精神は豫ねて憂鬱に傾くのであるが斯くなりては益々憂鬱の極度に達するやうになる。

さて病者を診査して見るに大した變化はなく、胃部に壓痛即ち壓して痛む位のことはあるが胃液の檢査しても變化はなく又食後五六時間には胃は空虛であり胃の運動力にも分泌機能にも少しも異常は無い、胃部に起つた神經衰弱であつて胃性神經衰弱と云ふのは至極適當の名である。

本病の原因は何かと云ふに多くは神經衰弱又は「ヒステリー」患者に起り又は心神過勞、精神感動の後に來る、其外酒精濫用、喫煙過度、房事過度、などが原因となることもある、又「マラリヤ」「インフルエンザ」の後に現はれたり、胃潰瘍、胃加答兒、慢性便秘などに續發して來ることもあり、或は遺傳や不完全な教育に因ることもあり又更らに原因のわからぬこともある。

本病は一般に云ふと婦人よりも男子の方に多い、此病は決して生命に關する程のことは無いが併し永く癒らないで榮養不良に陥ることがある、但し適當に治療すれば必らず癒る。

さて本病の療法は其の原因に應じて取捨を要する、若しも神經衰弱の爲めに起つたものとすれば先づ病者の職務を全く一時止めるか又は少くとも責任の重い仕事だけ避けて努めて閑地に就き、又は轉地療養して精神上の刺戟を避け冷水摩擦、水治法、電氣療法「マッサージ」等を行ふ頑固なる場合は嚴密なる醫師の監督の下に周到の注意を以つて加療せねばならぬ。

藥用法は先づ食欲の缺乏せる場合は「ホミカ」丁幾(一、〇を一日三回分服)、流動昆需蘭護越幾斯(四、〇を一日三回分服)又は丹寧酸「オレキシン」(一回〇、二—〇、三)などを用ゐる、

便秘の場合には「カスカラサクラダ」越幾斯、大黄、又は蘆薈などを與ふる、貧血の強い時は鐵劑又は少量の規尼涅或は亞砒酸(一回〇、〇〇〇五乃至〇、〇〇一)を用ゐる、不眠があれば「ズルフォナール」(一、〇)「トリオナール」(〇、五——一、〇)を臨臥時頓服する。

又鐵泉地に行つて鐵泉を飲用するのも宜しひ、

最も善いのは神經系の强壯藥であるが其内最も適當且つ有効なるは目下余の施行しつゝある注射療法

である、是は本病ばかりでなく一般胃の神經症に有効であるから後に纒めて精しく述べて見やう。

胃酸過多症

本病は胃の分泌神經の障害により起るので胃酸の分泌が多過ぎるのである、併し胃其物には少しも變化は無い、

さて本病は老幼何れにも起り得るが併し多くは壯年者で二十歳乃至四十歳の男子に多い、殊に精神の過勞又は憂鬱狀態に現はれて來る、故に「ヒステリー」症又は神經衰弱病者に來る、其外飲酒喫煙の過度、香料の多食などが原因となる、又慢性腸疾患、生殖器障害などから反射的に來ることもある。

本病の容態は先づ自覺症では呑酸即ち酸味のものが口に出ることや嘈囃即ち胸の灼ける感覺及び胃部に何とも云へぬ不快の感のあることである、大抵食後二三時に現れ漸次其度を增して後には痛を覺ゆるやうになる、而かも嚙まるゝやうな感じがする、又胸の灼ける感じは必ず起ると云ふ譯では無いが殊に鹽辛きもの脂肪多きものを食すれば其容態が現はれる。

本症に於て胃部の痛くなるのは其の空腹時に現はれるのが本病の特徵である、故に食後四五時間で胃中に何にも無い時又は夜中或は早朝朝食前に痛くなる、然るに何か食物を食すれば痛が輕くなるのが又一の特徵である、特に鷄卵、牛乳、肉類など蛋白質の食物を取れば痛が減ずる、或は少許の「アルカリ」類を與ふれば過剩の酸を中和するから痛は減ずる、食慾は餘り變らず、口渴や便秘は大抵伴ふて來る、又頭痛、眼暈、記憶力減退なども現はれる、

次に他覺症を云ふて見れば胃の內容物を檢査するに鹽酸を多量に含んで居る、其上肉類は極めて善く消化されて居るが澱粉質のものが一向消化されず多量に殘つて居る。

此病の經過は大抵永くかゝり容易に癒らぬが時には發作性に來り時々善くなつたり惡くなつたりすることもある。

さて本病の療法は先づ食養法として胃液の分泌を亢進するものは皆避けねばならぬ、即ち胡椒、山椒唐からしのやうな香料又は「ソース」咖啡、酒精、喫煙なども禁ずる、又凡べて酸類を禁ずる、即ち醋酸、枸櫞酸などは善くない、但し乳酸、牛酪酸、などは差支はない、要するに食物は蛋白質若しくは脂肪は最も善く鹽酸を中和するが故に胃酸過多症病者の食物としては最も適當である。

次に器械的療法として本病には胃洗滌が最も必要なものとなつて居る、實際多くの場合に効を奏する、早朝空腹時に通常の淨水を以つて洗滌する、又は食鹽水、重曹水で洗つてもよろしひ、重症の場合は千倍硝酸銀水で洗ひ後淨水で洗つてもよし。

終りに藥用法は主として「アルカリ」劑を用ゐて酸を中和し同時に疼痛を緩解するに在る、左に處方

例を擧げて見やう。

一、結晶重曹、　六、〇
　　瓜性マグネシヤ　一、〇

　　萇宕越幾斯　〇、〇五—〇、一

　　右一日量六回分服食後三十分及び三時間

二、瓜性マグネシヤ　五、〇
　　重曹　五、〇
　　炭酸加里　三、〇

　　萇宕越幾斯　〇、三五

　　右混和一日數回一回半茶匙宛食後服用

最後に本病も亦分泌神經の故障であるから神經强壯藥の注射療法が有効であるが後に詳述する。

神經性胃酸缺乏及減少症

是又胃の分泌神經の故障であつて胃酸の分泌が少ないか又は全く缺乏するのである、故に胃液を檢査して見れば酸度は極めて弱いか又は全く中性になつて居る、

本病の容態は主もに食後間もなく膨滿又は壓重の感がある、且又嗳氣が出る、時には胃部に刺すやうな痛を覺ゆることもある、食慾は少しも無い位に妨げらるゝこともあるが時には大した異常を見ぬこともある、或は腸の障害が加はり慢性の下痢か又は頑固な便秘が現はれることがある、

本病は胃液の少い爲め蛋白質消化が大に妨げられ爲めに病者の榮養は漸次惡くなり痩せて來る、

さて本病の療法は食養生としては何でも食品を細く切り且つ善く咀嚼して喰ふべきである、殊に植物性食品や脂肪少き魚鳥肉、及び牛乳、雉卵等がよろしひ

藥品は苦味劑が最も善い、反射的に胃酸の分泌を促すのである、其外「コンヂユランゴ」鹽酸「オレキシン」、食鹽水にて胃の洗滌、鑛泉飲用(殊に食鹽泉)など賞用せらる、又全身の神經病狀に對しても適當に加療せねばならぬ故に神經注射も無論有効である後に述ぶる。

知覺神經性胃病

以上の外食思缺乏症、善飢症、胃知覺過敏症又は神經性胃痛などの諸症があるが皆知覺神經の故障であつて一々説明するまでもなく其の病名を一見して略ぼ其の容態を想像することが出來る。

他に器質的の胃病はなくて多くは單獨にか又他の神經病の分症として現はるゝ、即ち食思は全く缺乏して甚しく食物を嫌つたり或は食慾は非常に亢進して牛飲馬食して尙不足を感ずる、共に病的である、

或は胃の知覺神經が過敏になつて、食物を取りさへすれば直ちに痛を感じ嘔吐を催すこともある、又神經性胃痛は其原因は種々雜多であるが兎に角少しの前驅症が有つてか又は少しもなく急に胃部が痛くなる、胃の痙攣でも起るが其れでないこともある、併し此發作は短きは數分永きは數時間に亘る、本病の特徴は其痛は局部を壓せば輕くなる。

以上は皆其れ〳〵對症療法の外根本的には神經の治療が肝要である、

胃弱の根治法

以上述べ來りたる如く胃弱には大抵二つ以上の胃病が混合して居り殊に胃の神經症が之に伴ふて居る場合が極めて多いのである故に此等の胃弱者は一方に胃の藥を服すると同時に或は全く之を癒して他に神經の藥を用る必要がある、然るに元々胃に故障が有る爲め內服では効果が薄い故に注射が必要となる。

余が目下施行しつゝある注射は神經の强壯藥を皮下に注射するのであるが胃の神經症には胃部に注射する、故に慢性の胃弱で容易に癒らぬ場合屢之を試みたが多くは著効を奏した、唯少し比較的高價（一回壹圓乃至五圓）と云ふ點が缺點ではあるが効果から云ふと最も優等である、余は左に余の實驗例を述べて見やう。

實驗例（一）

東京日本橋區濱町二ノ十二、ス、ヨ、二十二歲の男子、胃擴張症に胃酸過多症及び神經性消化不良を伴ふ、非常に痩せて且つ全身の皮膚は俗に云ふ鳥肌立つて乾燥してブツ〳〵粟粒のやうになつて居る、人より二層倍厚着して居ても寒くて堪へられぬと云ふ、胃部には動かして見ればガブ〳〵と云ふ所謂振水音が盛である、多年苦しんで居たのであるが余の著書「胃腸の衞生」を讀み余の許に來り治を乞ふ、先づ注射療法を試む、胃部に一筒、肩に一筒注射した、最初一回だけで振水音は減じ皮膚の鳥肌は殆んど全く取れた、其れに勇氣を得て注射を續行し二三日の間隔を置いて前後七回まで注射した、其結果漸次食慾は增し消化は善くなり振水音は全く去り自ら胃部に振動を與ふるも決してガブ〳〵鳴らぬやうになり、全身に溫暖を覺へ非常に寒いと云ふことは無くなつた、併し尙痩せて居り幾分か肉附きが善くなつた位に思ふて居た、其後一時注射を止め僅かに時々健胃劑を與ふる位にして居たが時日を經るに連れて食慾も進み食物の分量も增し從つて前日とは全く見違へるやうに肥滿し胃部下腹部などは陷凹して居たのが豐滿突隆するやうになり今日醫藥も用ゐず多年の宿痾を一掃して愉快に活動して居る、此例は注射が施行中著効を奏したのみならず注射を止めてから後日に及んで一層其効を現はした一例である。

實驗例（二）

前記病者の姉、オ、ス、二十六歳婦人、病症と云ひ體格と云ひ前記の弟と寸分違はぬと云ふて善い位似て居た唯病狀は弟よりも稍輕く全身に鳥肌すると云ふ程ではなかつたが併し寒さは強く感じ冬季は終日火厨に倚ると云ふ有樣、食思極めて不振、胃部の振水音は盛んであつた、痩せかたも甚しく骨と皮と云ふ風であつた、然るに家庭に於て心を痛める事情が弟よりも強かつた、此場合は注射が施行中には弟程の著効は見へなかつた、其れが爲め前後九回も行つたが後日に及んで漸次効果が現はれて來た、施行中も弟程になかつたと云ふだけで矢張り相當に効は見へた、目下病狀は去つたが未だ充分肥ると云ふ段にならず家庭の事情を改善して今一度何回か注射を試みる筈になつて居る。

實驗例（三）

東京牛込若松町、フ、セ、廿六才男子胃擴張兼神經性消化不良に神經衰弱を伴ふ、巧みに自ら腹部を動かし又は手指にて摩擦して胃部に振水音を起こさせる、而して自ら之を氣にして居る、然るに唯一回の注射で其音が殆んと全く頓に止み二回注射後には全く鳴るのが止んだ、是れには病者も余自身も驚喜したが暫くして又少しく鳴り始めたので尙注射を續行し前後六回程行つた頃には振水音も全く止み消化も善くなり食思も大に振ふて來た、是れ又隨分痩せて居たのであるが漸次肉附きが善くなり肥滿して來た。

實驗例（四）

三十二歳宇都宮の實業家、オ、タ、胃擴張症に神經衰弱を伴ふ、胃部のがら〳〵鳴るのが氣に掛つてならぬ、前後七回注射したが二回から自覺上大に氣分が善くなり三回からは胃部の音が大に減じ七回で全く無くなり根治の狀態になつたが尙其後時日を經るに從ひ全く健康の人となり矢張り痩せて骨立と云ふ風であつたのが肥えて來た。

實驗例（五）

東京神田駿河臺鈴木町、テ、キ、二十九歳男子會社員、慢性胃加答兒兼食思缺乏症に神經衰弱を伴ふ加ふるに高度の貧血があり顏色蒼白、全身痩せて眼緣の赤いのが目立つて見へた、此人は一回一回注射毎に著効が現はれ漸次食慾は振ふて來る、氣分は善くなり元氣も出で六回注射した頃には胃の容態は殆んど拭ふたやうに去り八回の頃から貧血も去り漸次肥えて來た。

以上の外、慢性胃加兒に神經性消化不良を伴ふた者胃酸過多症兼神經衰弱者或は胃知覺過敏症、兼胃下垂症、又は最初掲げた諸症の各種混合併合症が何れも二三回乃至七八回の注射中から注射後にかけて根治した實驗例が澤山あるが皆似たやうな話であるから其煩を避けて茲には省くとしやう。

最後に余は切に世人に望む、若しも慢性の胃弱者にして如何に胃の治療を加ふるも容易に癒らず多年苦惱する人あらば其れは必らず何か他に胃の神經症を混合し在るが爲めである所以を悟り心氣一轉一方に精神の修養方面に心を傾くると同時に神經强壯藥の注射を試みて陰雲闇霧を一掃して靑天白日を

仰ぎ活潑々地の人となりて世に活動するに至られんことを(完)

胃戒十則

一、胃病は萬病の基なり
二、病ば口より入る
三、口は禍の門なり
四、胃弱者は節食せよ
五、健胃者は飽食せよ
六、良藥は口に苦し
七、苦味は健胃劑なり
八、過食暴飲は嚴禁
九、胃健なれば全身健
十、胃弱ければ全身弱

◎追記

本書發行以來余は隨分澤山の病者に余の注射療法を實驗して見たが其の實例を悉く列擧するの煩雜を避けて余は左に其の成績に付て一つ書にして述べて見やう。

一、胃擴張の振水音即ち「がぶ〳〵云ふ音」が注射で止まるのは實に妙である、多くは三四回の頃に止む、最初一回で止まることもあるが其時は再び出て二度目に止まれば大丈夫である。

二、慢性の病者は多年の熟練で巧みに腹部に力を入れたり拔いたりして振水音を出すことが極めて上手である、故に注射中は成るべく自ら胃部を鳴らすことは止めるやうにする、三四回注射の後に試みるに大抵は鳴らぬ、但し多年の熟練者は矢張り「グーグー云ふ音」を出すことがある、是は眞の振水音ではなく腸の摩擦音である。

三、胃の振水音は普通胃の藥やら胃洗其外大抵の加療では容易に除去されるものでは無い、其れが短時日に取れるので其時は病者の氣分は此れだけでも著しく善くなる。

四、其れ等の關係からであらふ、單純の神經衰弱よりも胃弱兼神經衰弱即ち胃と腦神經と兩方惡い方が注射の効が著しく現はれるやうである。

五、胃の充滿の感即ち空腹時にも胃の張る感じのするのは結局取れることは取れるが振水音の取れるよりも遲い。

六、慢性の胃弱者は痩せて居る上に皮膚の感覺が過敏になつて居るから他人よりも寒むがりである、診査の爲め衣服を開けて腹部の皮膚を風に當てると直ぐ粟粒が出來所謂鳥肌だつて來る場合が多いこんなことは注射で漸次取れて寒むがりでなくなる、又暑氣にも弱いのが强くなる。

七、胃弱者で貧血を伴ふ塲合がある、矢張り注射の回數を重ぬる內又は何回か注射して之を中止してから時日を經るに連れて貧血が取れて來る。

八、食欲は著しく振つて來て却つて一時不養生をし過食に陷ることがある、其時は少しく注意すれば直ちに回復し食思不振缺乏など云ふことは無くなる。

九、便通は大抵軟便となり回數も稍多くなる、故に便秘の人には大層具合が宜しい、併し普通一日一回硬便の人は軟便となり時には下痢樣便となる、又一日二回位になり多過ぎることもあるが漸次に丁度善い具合になる。

十、便秘と下痢と相互に起つて來る病者には漸次便秘も取れ自然に軟便を快通するやうになり從つて又下痢は無くなり一日一回普通便となる。

十一、胸の灼けること、酸味のもの丶口中に出ること、口中不快、糊をかむが如き感、神經性消化不良、神經性嘔氣、胃痛、など大抵何回かの注射で取れる。

十二、胃癌と胃潰瘍とには無効である、其外本書に揭げた胃病には大抵有効である。

十三、胃弱者には胃部に一本又は左右二本づ丶注射する、胃弱兼神經衰弱には胃部と肩部と交互又は同時に一本づ丶注射する。

十四、舌苔は薄いのは一二回、厚いのは三四回で大抵奇麗に取れる、病者自身に鏡に映して見て善くわかる。

十五、參考の爲め毎回握力を試驗して見るが大抵右二十、左十八位のが漸次右三十以上左二十五以上に增して來る。

明治四十五年六月二十日印刷
明治四十五年六月廿三日發行
大正四年七月十一日六版發行

胃弱の根治法
定價金參拾錢

著作兼發行者　東京市四谷區東信濃町九番地　田村化三郎
印刷者　東京市麹町區下六番町十七番地　松澤玉三
印刷所　東京市麹町區下六番町十七番地　同勞舍

發行所　東京四谷區東信濃町九番地　振替口座東京貳壹參六六　健友社

不許複製

2H16

醫學士　田村化三郎氏新著

神經衰弱根治法	定價參拾錢 郵稅四錢	
胃弱の根治法	定價貳拾五錢 郵稅貳錢	
歐洲土產 バルソコン療法	定價貳拾八錢 郵稅貳錢	
延身法	定價參拾錢 郵稅貳錢	
喘息の根治法	定價貳拾五錢 郵稅貳錢	

東京四谷區東信濃町九
振替東京貳壹參六六番
健友社

內科腦神經科
宅診每日午前中
東京四谷區東信濃町九
醫學士　田村化三郎

帝國健康增進會
健友社內
規定要二錢

醫學士　田村化三郎氏著書

神經の衞生	定價參拾錢 郵稅四錢	
肺の衞生	定價五拾錢 郵稅四錢	
胃腸の衞生	定價參拾五錢 郵稅四錢	
肥る法痩る法	定價四拾六錢 郵稅六錢	
肺尖加答兒根治法	定價參拾錢 郵稅四錢	
善く眠る法覺る法	定價拾六錢 郵稅貳錢	
男女相互の警戒	定價貳拾錢 郵稅貳錢	
實驗健腦法	定價五拾五錢 郵稅六錢	
神經衰弱精神療法 弱者道	定價五拾錢 郵稅四錢	

東京四谷區東信濃町九
健友社
振替東京貳壹參六六番

終

53
118